

釧新郷土芸術賞に輝く

< 1 >

五十一年度釧新郷土芸術賞の受賞者が決まった。郷土の芸術振興のため積極的な発表活動と後進の育成につとめ、芸術の深奥追求に精進している人たちが、絵画では釧路川の四季に取り組み、地方色にむく人物にもモチーフを広げている藤村正豪さん、皮革染でほろけつ染めの手法を皮革に取り入れて新しい美を生み出した金沢初代さん、日本舞踊では新しい民謡の振り付けと普及に意欲を燃やし曲調にもいとど花柳徳伸さん、演劇ではグループ結成以来十余年、常に芸術性純度のすぐれた戯曲を舞台に掛け、まじめな研究を積んでいる「どらま・ぐるうぶ」（永田秀郎代表）の三氏、一団。二十六日授賞式を前にそれぞれの業績とプロフィールを紹介する。

受賞者の横顔

藤村正豪さん（五〇）

（絵画）

絵筆を握ることになった。そのきフランスに絵を学びに行った経路に任んでおり、自分が描いた絵をきっかけは地元画家で日展に出展、を持つ小林一雄さんが近所の社宅 自分で作った額に入れ、創作の喜

川面に影を揺らする漁船、雪をかぶった河岸、幣舞橋など釧路川の四季を長く描き続けている。十三年前の三十九年、全道展にての釧路川風景で初入選して以来、十五回の出展中、十一回入選している。

絵との出会いは三十年前の終戦直後で、それまではキャンバスに向かうどころか絵筆も握ったことがなかった。当時十九歳で采銅して太平洋炭鉱に入社し、翌年から



絵は私の青春だ 自分の生の証しさぐる

ひびいたっている姿をながめているうちに自分でもやってみたいという意欲が湧いて来て小林さん宅に通うことになったという。「釧路に来たばかりで友達もないうえに、終戦直後の貧しい社会、何の楽しみもなかったなかで、小林さんの絵を描く姿だけが「カレイ売り」も、寒さに耐えながらすみ火を囲む二人の行商のおばさんが、ジッと客待ちして座っている「生活の厳しさを表した」もの。

制作活動のほか福祉会館で行われているアトリエ教室の講師を三年前から行っており、二年前から釧路刑務所の受刑者を指導するなど、油絵の普及、底辺拡大にも力を入れている。絵をはじめて十五年ぐらい経ったころ、絵筆を捨てようかと思ひ込んだことがある。「絵でめしを食うつもりはなかった。しかし絵をやめて自分が何が残るか考えたとき無性に寂しくなった。自分が生きていた証しをせめて子供に伝えることが出来たら」と、再び描き始める決意を固めた。絵は私の青春、そしてここまで私を成長させてくれた」と振り返っている。

千鶴子夫人（母）、長男・正宏さん（二）、次男・道平さん（三）も絵に親しんでいる。「私が簡単なように描いているのを見て描き始めたよつた。絵は誰にでも描け、楽しいものだ」という。昭和二年函館生まれ。現在太平洋炭鉱通気係で、坑内などの標識類も描いている。

現在釧路美術協会員、全道展に所属している。ことしの釧路美術協会六十周年記念展で記念賞を受賞したが、この時の絵は六カ月をローカル色を出した人間臭い絵を」と藤村さん